「働く女性応援ネットワーク会議」第２回会議　会議録　要旨

１　開催日時

平成２６年５月２７日（火）午後１時３０分から３時まで

２　場所

県庁４階　４０２会議室

３　出席者

委員（１６名中１１名出席）

加渡いづみ、藍原理津子、兼松文子、川原佳子、近藤洋祐、佐藤有美、葛籠枝美、橋口浩子、元木秀章、吉田基晴、米澤和美　（敬称略）

４　会議次第

（１）開会

（２）徳島県商工労働部労働雇用課長あいさつ

（３）議事

①第１回会議の概要と課題整理

②平成２６年度の取組み（案）

③意見交換

（４）閉会

・

・

・

６　発言概要

（谷口課長）

専門性と熱意を持たれた皆さん方と一緒にお仕事させて頂けるというのはたいへん光栄ですし、一緒にお願いしたい。

２点目。今回の会議に労働局の方に評価頂きまして是非とも参画をさせてほしいということでお話を頂きました。会長さんにご相談しましたら快諾いただきぜひともということで徳島労働局の雇用均等室長であります佐藤さんにお越し頂いた。

３点目。徳島県で飯泉知事が平成２６年度、女性の活躍元年にしようということで、いろいろ取り組みを始めている。今こそ、この機運と言いますかここで頑張らないと、いつするんだという時期。

（事務局説明）

委員の皆様からいろいろなご意見をいただいておりまして、女性のキャリアアップに関する課題としましては、目標となる女性像を発信していく必要があるといったご意見、それからワークライフバランスに関する課題としましては、仕事と家庭の両立が課題であり、育児支援に取り組む必要があるといったようなご意見、それから多様な働き方に関する課題としましては仕事を続けやすい環境づくりが大切といったご意見など多くのご意見をいただいたところ。それを整理して、女性のキャリアアップ、ワークライフバランス、および多様な働き方の三点について課題の抽出と対応策の整理し、課題及び対応行動計画案を作成した。

（資料に基づき、平成 26 年度の取組案を説明）

（加渡会長）

「リカレント」について、私の方から一つ説明を。

いろいろな事情で一旦退職をしてブランクがあるけどもう一回社会に復帰したい、ちょっと離れてしまって今は知識がない、という方を対象とした「リカレント」、つまり「学び直し」を考えている方の受け皿として、短期だがしっかり検定資格を合格できるまでしっかりサポートし、もう一度大学から社会の中に送り出すと、そのお手伝いをさせていただ

きたいというのが四国大学リカレントプログラムの趣旨（四国大学短期大学部ビジネス・コミュニケーション科）。パソコンのスキルとかコミュニケーションスキル、それからマナー講座、そういったとこを全てパッケージにして、集中的に皆さんの学びをお手伝いできるかなと考えている。

（米澤委員）

（県の）提案というのが、従来通り、ちょっと面白くないなっていう感じがする。徳島ならではのちょっと光るものが何か一つ欲しいというのがあって、育児の支援ということで実際の現場で見ていて、病気になった時の支援ということで、徳島で、病児保育とか病後保育とか、そこを充実させるとか。それともう一つは、低学年の学童保育の充実ということで、どこかの市町村がやっていたと思うが、高齢者の活用。知恵と知識と経験を生かして貢献できないか。

あとは、管理職のところにおいて日経新聞に掲載されたダイキン工業さん。（育児休業から）早く戻ってきてくれた人にはそれなりの負担がかかっているはずだから、そこに対して支援をしようというのを会社がやっている、こういうものがあっても良いのではないのかなと思う。

（川原委員）

学童を高齢者の活用ということで、学校の廃校になったような空き教室や公民館で、おじいちゃんおばあちゃんも子供をみたら元気になる。子供さんも、学べる、昔の遊びを学べる。勉強についていけないこどもに教えてあげるっていうことが、できていけたらいいなと、ファミサポで全体の隙間を埋めるような動きができたらいいなと思う。

ただミスマッチや依頼会員のニーズに答えきれないケースが多くなってきている。お金のことではなく、300 円でも 500 円でも預かるのでも良いけど、いざ事故が起こった時に、保証問題について、行政も運営団体も私たちを置いて逃げないという確信が欲しい、っていう声もある。だからボランティア精神があっても決して楽な仕事ではない。

在宅での保育。これもやはり学童であるとか、きちっとした場所がないと、なかなか難しいし、やっぱりボランティア精神というのもいいですが、やはり経済的に一つなりたっていくというのが高齢者社会の中で、必要になっていると思う。一つの制度というかビジネスモデルとしてきちっと、ありのままを徳島方式でないけどやっていければいいのかな

と。

（近藤委員）

安心とか安全を担保にするからこれだけの価格はお支払い下さいという仕組みをまず作ってからでないと、保証の問題も保護者もなかなか受け入れにくい。多分ママさんたちは合理性を求めるということでそういうことを言ってしまうと思うが、実はサービスを提供する側は情緒的な価値を提供したいのに、それが徳島でよくあるパターンだけど、そこでのマッチングというのはきちんと受け皿となっている仕組み作りをしてあげると、更に状況が変わってくるのではないか。

（吉田委員）

女性のキャリアアップ支援について、企業として今退職した方を再雇用といった時に、女性だから、子育てしているからというよりも、企業側の視点から見ると今の企業の組織にない物を持っている人に来て欲しい、優秀な方をとりたい。

せっかく四国大学のビジネスコミュニケーション科で、リカレントプログラムをやられるにあたって、例えば、今企業で外部の企業の中と外で言うと、外向けの接点をどう増やすか。きちんと理解してもらうか。武器を作らないかという、非常に重要だと思う。例えば Facebook・Twitter という、数年前には企業が使う物ではなかったという物を、大企業、ベンチャー企業を中心に結構活用している。

女性独特の女性が持って生まれたコミュニケーションのうまさというか、それが企業にとって新しい戦力、コミュニケーションスキルとなる。メールが使えるワードがうてるでは当然で、その先の企業広告の外部との接点で働けるスキルを身につけてあげるような、もう一歩進められるといいじゃないかなと。

LINE や Facebook でやれていたことが今の時代仕事にできると、再就職の女性にとってはハードルを下げて、雇用する企業からすると、今の社内の男性ではできないことをやってくれるみたいな、両方のプラスを乗っけてあげることができるんじゃないかなと。

（近藤委員）

今の話はすごい賛成で、今までは脈絡と続けられてきた歴史というのが、こういうのを

何かできないような社会の構造だったかもしれないが、それができるようになってきたということはものすごい社会の構造が変わってきている。Facebook や Twitter とか使って情報発信を１万人について､そこにスポンサーがついて 1000 万円ゲットみたいなのだったら、ビジネスモデルとか目標があると思う。

だから人はどこに価値を感じているかは分からない。ということから一歩踏み出す勇気でそこにもっていくというのが、今の話を聞いていてすごく共感できた。

完全に縦割りの組織全体の中の一人として評価されていたものが、個人ごとに評価されている時代、個人の魅力をより発信しやすい時代になってきている。

（吉田委員）

都会からきているサテライト企業やベンチャー企業の広報に講師になっていただいて、Facebook を使った企業 PR を学ぶとかすれば、その支援を受けた女性は、徳島の企業から見た時に Facebook を企業として使いこなせる人となる､昔になかった物差しというか肩書きになると思う。

（葛籠委員）

私どものコールセンターの業界でも通信販売のお客様たくさん多くおつきあいがあるが、今までの合理的に物を販売するとか価格競争であるとか、お得感をお客様に訴えてという世界から、お客様とつながりをもっていくというようなところをどうしたらいいか、と悩んでいる企業さんが多い。

そんな中で、私どものコールセンターに注目していただいているのが、徳島の接待の心だとか､おもてなしの心というところ。今授業の中でもただ一般的なマナーだけでなくて、お客様の感性や気持ちをくみ取る、あるいは、感性が磨かれるというような、そういったものがもっと学べるのではあれば企業側からすると、そういった方を是非いただきたい。

（近藤委員）

良い物を作るのは前提条件で、そこからもっと付加価値が付け、ストーリーがあって、消費者にうれしい物であればすごい売れますよね。

（葛籠委員）

ストーリーもそうですし、電話だとか対面の買い物の仕方という物がもっと求められてくると思うので、そういったところで徳島の女性の阿波女の元気な生き方とかおもてなしの気持ちといったところを勉強できればうまく活用できれば良い。

（加渡会長）

テレコメディアさんのところはほぼ100%近い女性比率という。女性の職場ならではの女性のキャリアアップの支援の仕方とか、多様な働き方とか何か企業の中で工夫をされていることや感じられていることなどはありますか？

（葛籠委員）

短時間勤務、フルタイムであるとか、土日ぐらいしか働かなくて良いとか、1ヶ月間15日ぐらいしか働かなくて良いとか、働く制度は整えたけれども、制度と人をつなぐ、という作業をしないとなかなか制度があっても一歩踏み出せない。そのつなぎ方をどうするかっていうのが実現化の課題。

（藍原副会長）

まずは経験した方・修了した方の就職先を見つけるマッチングフェアみたいなものをいろんな経済団体、企業を集めてできたら良いなと。その中でリカレントプログラムにて、自分をPRできるようなところまで、できるようになれば良いなと思う。

（米澤委員）

どこかの社長さんだが、女性には管理職になれない、なぜなら男性は生まれたときから闘って生きているからだと。二世の方っていうのは、意識を変えないといけないなって思っている。

もう少し上の方っていうのはICTの技術っていうのは、使えない。面白そうだけど使えない。今のままの営業ではだめっていうのは分かっているけど、どうやってやったらいいか分からない。（藍原副会長が言われたように）マッチングできればなあと、フェアがいいのか、なにかそれを持って営業するのか、なにか接点持つ方式っていうようなものがあれば。

（藍原副会長）

短時間でも Facebook なり、Twitter なりというものをやっていただけるようなパートを自社の中で来ていただけるだけでも、戦力になると思う。

（近藤委員）

なんで変化を恐れているのかというのを紐解いていくと、意外と経験則が多い。

自社のタクシーについて、無線をタブレットに変えますと決定したところ、猛反対する社員がいたが、いざ使わせてみると（最終的には）こんなに便利と思わなかったと。何で拒否したのって聞いたら、変化するのが怖かったんだと言っていた。（このように）分かっている世界から小さな成功体験から形成されている経験則からできあがっている。

（しかし今は、）女性はこうでしょ、ああでしょというのが、昔は丸め込まれていたっていうのが、そうできなくなってきた。

（吉田委員）

今、企業とお客さんのコミュニケーションは LINE だとか Facebook だとか、良い意味でも悪い意味でもだらだらっとしたコミュニケーションになっていて、スタートと終わりがよく分からない。延々となりのおばちゃんと会話できる、意味があるようでないような会話。そこの能力が私は女性は高いなと。

そこが今社会に必要とされているときに、女性がそれを担える。特性プラススキルみたいなところを付けてあげるといいのではと思う。

（元木委員）

先程も意見が出ていたんですが、マッチングをどうしていくか。いろんなスキルを持って働きたいという女性の希望と、こういうスキルを望んでいるという企業をいかに合わせていくか。労働局さんだけでなく、企業と労働者の間だけでなく、間にもうひとつワンクッション支援する相談窓口が一本化されればいい。労働局さんが来ると、人事課が構えてしまう。

ファミリーサポートセンターを知らない方もいらっしゃいますので、幼稚園とか保育所とか小学校とか、案内をもっとすればいいのかなと。利用した人の意見を詳しく載せるとか、学校を経由してもっと周知していけば良いのかなと思う。

はぐくみ支援企業パネル展の積極的な開催もあるけど、新聞社さんにもコラムとかで企業の内容を取り上げていただいて、企業紹介のような掲載をしていただいて、良い企業はどんどん紹介していく。

徳島県もM字カーブでは全国の平均を上回っているが、やっぱり長期的に見て、労働力が足りなくなっていく、地方にも必ずその波がやってくる。女性が働くのは当たり前で、働きたいところに皆さんが働くという社会づくりを、いち早くつくる事が大事で、スピードをもってやらないと、なんとなくやるだけではもったいない。努力目標も作るなど、工夫していって欲しいなと思う。

（橋口委員）

私も育児ママだが、病児保育の枠を増やして欲しい。

いろんな方が仰っていたのは、徳島には情報が少ない。たくさんいい取り組みをしているのに、通っていてもなかなか見えないとか、気付いたら終わっていたとか。情報提供の幅を広げてわかりやすく、たくさんの方に情報を提供する場があればなと。

徳島県が今後取り組んでいこうという関西発祥のＢＰファシリテーターというのがあって、初めて出産の方限定で、0～2 歳の限定のメンタルケアというか交流の場みたいなのですけど、そういうところを徳島県が取り組んでいくので、そのほかにケアとして定期に集まりを月四回やるみたいなので、いれていっていただけたらなと。ファシリテーターになるには二日間受講しなければいけないけれども、受講するまでに審査があって大変厳しいが、受講料も県が負担してくれる。受講後も審査があって認定されるとは限らないので、きちっとした指導・教えがあるところなので是非それもうちに入れていただきたい。

（加渡会長）

女性支援の話ではないが、この様な会議で必ず出てくるのが情報発信。発信する側がこんなこともやっています、あんなこともやっていますというのが発信する側の理論。取り手になったら私のところには何も届いてない。受け手というのはドストライクしか受信とは実感しないので、その格差と言いますか、どの施策もどの会議に行っても落ち着くところは情報が少ないとなってしまうんですが、どういう方法で女性支援の情報を発信すればよいか。何か案があれば。

（橋口委員）

ネットを使ってやっているというのが多いと思いますので、小学校とかの情報発信のほとんどの方は携帯やスマホを使われていて、ネットが今一番なのかな。

本当は対面でした方が良いのかもしれないですけど、なかなか難しいところもありますので、ネットだと後で画面で確認できたりとか、好きな時間に見られるっていうのが、私も結構活用していますので、年代に限らずもっと重宝できるような。

（佐藤委員）

そういう世界で生きてこなかったので勉強になりました。

今は 100%と思っていても、来年はどこか足りないものがあっていたり、中身ができたりして、くみとらないといけないと思って。そういうことする人は情報を取ろうという気持ちがあるから、紙やインターネットを見たりするけど、普通の人は仕事で手一杯になって寝ると思う。いろんな方法で発信してお金かかるけど、紙ベースでも必要だし、テレビも必要だし、ラジオも必要だし、ネットも必要。誰かからの又聞きっていうのも情報と思うので、いろんな方法でやるしかないんだろうなって。やってないから怖いし今のままでいいと思ってしまうが、やってみたら意外とこっちの方が簡単（とわかることもある）。

働く女性という名前なので、働いている方を中心になるが、次の働く女性。やっぱり高校生、中学生クラスで、ものが言えるような言いたい子には言わせてあげてもいいんじゃないかなと。高校生、中学生、小学生会議ちょっと開いてあげてもいいかなみたいな。これを見ることで、いろんな価値観を認められる人になって欲しい。

（兼松委員）

10 年くらい前から、働く女性を応援する、仕事と子育てを両立しやすい職場環境の整備事業取り組んでいて、企業がキーパーソン、経営者がキーパーソンになると思う。

企業のトップの方がどれだけ社員の方を大事に思って、環境づくりを行うかということが、ますます求められてきているのではないかなと。今まで男性の職場だったところが、女性の視点で仕事をするからそれが企業にとってプラスになる、そういう多様性を受け入れることによって、企業にとってもプラスになる。そういう存在に女性がいるということを企業の方にも理解をしていただきたい。社員さんの幸せが CS につながるということにつながらないかと模索している状態で、こちらは後押しする取り組みが必要でないかなと。

人と人のつながりがあれば、違う分野の人と手を取り合うということも感じているところですので、企業の意識改革はぜひしていただきたい。あと同友会の方針などのワークライフバランスの推進をお願いしたい。

（加渡会長）

今まで出ました意見の中でキーワードになるものをまとめてみたいと思います。

1　まずは地域あるいは社会全体で支えるために子育て事業をビジネスモデル化することが必要ではないかということ。

2　今の時代にこうした、女性の感性やあるいはコミュニケーション力、センスを活かした、または活かせるようなビジネススキル。それを企業の強みに使ってもらえるような戦力になるような女性のスキルアップが必要ではないかというところ。

3　制度を作っただけでなく、制度と人をつながなくてはいけないこと。

4　出口の確保ということで再就職のためのマッチングフェアあるいは窓口というものを一本化整理する必要があるのではないかということ。

5　努力目標を設定すること。

6　情報提供をあれもこれもいろいろなツールを使いながら丁寧に情報を提供発信しよう。

7　小中高校生のものを売る小中高校生会議を実施しよう。

8　まずは職場環境作り、ワークライフバランスの方向性を明確にしながら、自助、共助、公助のつながり、あるいは更なる環境整備をしていこうということです。

（佐藤雇用均等室長）

今日はご招待して頂き、いろんな分野の方の貴重な発言を聞かせて頂きましてありがとうございました。

労働局では、ポジティブアクションの取り組みを推進しているところです。

また６月２６日に男女雇用機会均等セミナーを開催します。

今後ともどうぞよろしくお願いします。

（加渡会長）

徳島には、働く女性を応援する団体、会議というのはたくさんあるが、様々な団体と協

力しながら、相乗効果をもって、最終的には徳島の女性フォーラムで効果を発揮できたら良いと思います。まずはいろんなところの連携を図りながら、徳島の女性活躍元年としてこの会議を進めていけたらなと。どうか皆様方のご声援をお願い申し上げます。